

三才本草圖說卷之記

特 259
74

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



發刊の辭

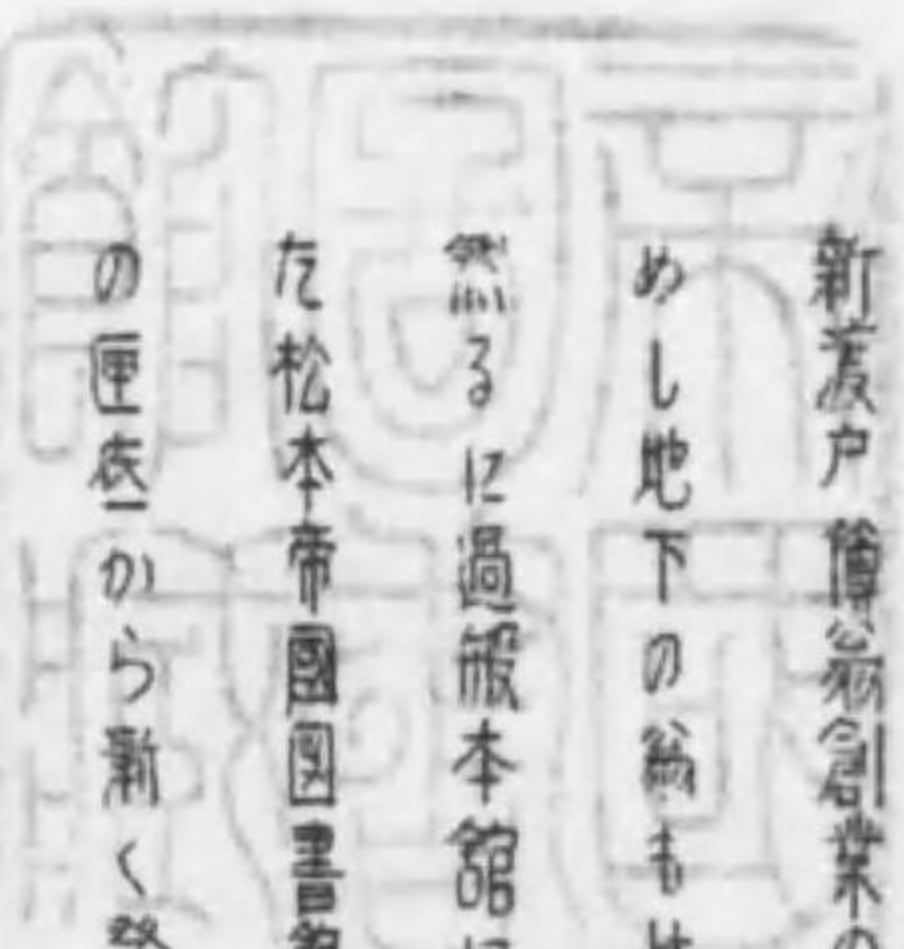
發行所寄贈本

時局の推移につれて銃後の守りは一層緊張、活潑を要する秋、本縣三本木平國營開設の快報を聴く。洵に欣快に堪へない。然も此の國營開墾指定地は吾が郷土の偉人

新渡戸隆翁創業の靈地で、翁の血と汗とは依つて培はれた未完成開拓の戦跡である。定めし地下の翁も此の舉を見て會心の笑みを満せる事と信される。

然るに過般本館に開催した中央図書館長会議の席上に於て東北文化開墾の爲め大評定した松本帝國図書館長及東北々海道各館長一行の新渡戸文庫訪問に依つて、前年回家後蔵の匣底から漸く発見した「三本木平開業之記」と云ふ珍書の公開さるる動機が作られたに出版着手の後此の報に接した事は眞に奇しき因縁である。

本書は翁の開拓に関する偉大なる経倫を其の子十次郎氏に口授代筆せしめた大文字ごあって、実に斯界の絶好読料である。さればかゝる貴重文献をかくの如き粗末なプリント刊行にするのは禮を失する者と攻むる人あらん。然し眞に翁の精神を汲み、其の行を



特259
74



三才集本圖書叢書之記



体すれば質実軽易なる此の刊行こそ故人の意を継ぐものなるべしと深く信じ敢へて此の
体裁を採り同様の士二百に限定頒布せんと欲した次第である。
終りに臨み翁の孫現文庫長太田常利氏に辱くその好意を謝す。

昭和十二年十一月 全国図書館週間の日

青森縣中央圖書館

吉岡 龍太郎 識



三本木平開業之記

奥州盛岡城主南部美濃守源利剛朝臣領分

奥州北部三本木平新地開業

開発願主

藩中

新渡戸

傳平常澄

傳嫡子

十次郎平常訓

同

十次郎嫡子

同

邦之助平常光

石園中一円上水引渡し相成候得は数十万石に及び候へ共先は十萬石見込にて應筋音詰
之事

(六)

一 氣候は四十度の未なるか故に寒冷の地といへとも萬國五大州の中帯の真中にして春は
暄夏は暖秋は冷冬は寒雪は十月末に降二月初に消霜は九月末に降三月末に消是四季の
中和に叶ふと云ふへし日本南方の人はいかにも寒冷の地と恐るへき様なれとも長崎よ
り北蝦夷地迄日本地にしては三十度より五十度迄の眞分なれば敢て恐るへきにもある
ましくまた当國は鬼柳より午嶽まで八十里余ある中に三本木は四十里前後にしあれば
是又此國の眞中也是を以て是を見れば萬國に對し日本に對し當國に對し過不及なき真
中の地なれば氣候も寒熱中和なる故用業盛に力を盡し地力を究むるはけ世界第一の田
畑豊饒人物繁生の地味ある所といふても可ならんか

一 地理は大曠野の外西は連山にして良材雜木十分にして材木薪炭幾軍用ゆるといふ共盡
る事なく誠に大川の流此阿るか故に出し方并理なり東は八里の岡廣平の砂濱にして麴

澳メ柏島万俵出廻船は勿論小舟も沢山なり遺産も少々有之石魚塩油並メ柏等肥養に用
ゆるに足れり尤三本木は天下の往還にして南は五戸宿の代官所北は七戸宿の代官所何
れも三里程道中平地同様なり東南十里にして八戸の嶽下あり此地東廻り海上運送を能
し七戸より四里北にして野辺地溪あり是は西廻り海上並松前通船の自在を極め又南野
平の下タに六戸川と申大川あり川魚公養献上に相成美味を生し東北の方四里を過ぎ小
河原沼の大沼ありて貝類毛鯉鮒繁生し是を以て山海の産物は勿論山手海手大沼大川の
并理を並し行程は五戸宿七戸宿は日廻り道入戸溪野辺地溪三戸宿十和田山湖上迄は一
日道南は福岡より一戸迄北は田名部青森溪迄南は八戸より久慈溪迄東北は泊りの洞迄
二日路也木込在込え敷百ヶ村野中野平の端々にありて兼々諸用并難く舌しみ居る中へ
交易の市日を定むる時は會買の融通を極るに至れりしかれば四方八達之地といふても
可ならんかな

一 三本木平は往還筋なれと野平故に驛場は是迄傳活寺取より七戸駅迄五里程の継立にし

(七)

て人馬甚だ苦しめり彌三本木開くる時は追々本駅ともなうんか左すれば七戸へ二里余傳法寺江二里ほと誠に道中平地同様なれば此里に住る駅所の夫傳馬大に心安く渡世を送るへしと思はる最卑面取より御分中駅の類ひあり是もまた繁昌の一端なり

一土地は廣大なるか故にはしらき土彌は土泥土はせ土のなく土色々にて土性上地下地定まらず惣して六尺五寸赤坪三百坪を一反にして斗代色石式斗より五斗迄も付六ツ五トより三ツ成まで平均八斗代も付四ツ五ト成見込之事

一水之手は三本木平より西に当り水源は五戸縣十和田湖と申て四里四方深淵不測にして夫より流れ出る事五里程を十和田川と云又五里にして奥瀬川と言又五里にして相坂川と言また五里にして百石川と言惣名を大戸川といふ又大羅瀬川共言河身五十間荒瀬急流能筏舟小舟を通し所々に洲あり其水淡白清水皮故酒は清く井之魚は清く美に斯物を漕げは白濁なり其産は鱈魚其味美にして天下一たり故に是を公献す其次は鱈魚かつか大貝山、辺魚也何れも其味膏梁にして美なる事諸川の及ぶ處にあらす此川を奥瀬川の

内七戸縣法量村中里川の落合より天狗森の岩窟を穿ち事一回四方長サ九百間山を越して同縣熊の沢に移し夫より同縣深待村鞍出山半腹の岩窟を穿ち事千五百間にして同縣深待村天神と申に流出す夫より同村下山より高野原の半腹幅四間深サ七尺の川を堀事二十町余にして同村京の館と云い及ぶ是迄本川より水の高く登る事九丈是より幅拾四間深三丈五尺堀穿ち事拾町余にして三本木野原に上流す是より幅拾四間深サ七尺に堀事二里にして三本木新町より五戸縣相坂村にて清水に至る此向支堰六口也此六口より數流に分流する事幾千筋也爰に於て安政二年九月より萬延元年三月迄六ヶ年の星霜を積初て蘇茫たる大郊野一面に水の手行渡る也以後高清水より五戸縣百石村濱迄まで六里の郊野川を通す田圃を爲事莫大の黄金なき時は及ひかたきを以て先暫らく普請を止て後日金配の行届を待たり

一呑水遺水は右上水本川に不淨を兼し呑水とすまた遺水とす外地中五尺堀れば淡白の清水湧出る故井戸を堀るも安く又尿水なども湧水にてよろしき事にも至る也

一 午馬は南部領は日本一也南部領の内三本木は隨一也然れは日本一の午馬沢山に生育して誠に直段も安く飼育も又安し

一 三本木平西に深持村南に相坂村北に洞内村ありて往古より米穀を生し野平には晴山村三本木村ありて畑物業は大根蕪干房にんしん木瓜さ、け茄子なんはんかほちや夕類等何も能出来し爰を以て三本木原も水の手さへあれは米穀必ず生しへきを見切り去年上水極り当手試に田形式百石畑高百石程仕付しに何れも本田同様の奥のりに至り飼養料を揃ふに足れり爰を以て初穂園君に献し賞替を蒙しも難有事也然れは年を追て精研術を盡し時は数十万石の米穀を生しべくまた何程有命米阿りといへとも松前より北蝦夷地迄の賣捌あれはさらに命る事を知るへからず

一 物産開業之仕法

一 駄馬市之事

右は田名部野辺地七戸五戸より出産の駄馬買入小牧を持ち飼立置伊達園東馬買入

るに任せ賣買いたしむ駒二歳も飼立賣出し候事

一 瀬戸物焼出之事

右は深持村鞍出山下山堤の辺洞内村白岩の崎より客僧田の辺に白岩塘土沢山に有之十和田山よりけやき炭焼出し職人召抱候へは瀬戸物何程も焼出しに宜し尤当國中瀬戸焼一ニヶ所有之候得共郊の産業なれば國中の入用数千金代他領より買入来るを三本木におみへ売立の仕法相互時は國益莫大といふへし

一 養蠶之事

右は三本木より西に入る事一里又二里の間山桑林を肖くるに養蠶法思之稀に養蠶ものあれ共糸取事を知らず愚といふへし今此処に養蠶案内の者をも以て法を立る時は幾ばくの縮糸真綿を生すへし

一 馬鞍製造之事

右はかたくりを製し酒を造り味噌となす仕付候者より買入其製造の役所を取建他

邦に是を交易すへし

一 網漁之事

石は麻糸を莫大に仕付いたし、網網、網を漁出させ、市川濱地邊は勿論、松前、渡場に賣出し時は、数千金の利を得るにいたるへし

一 菜園之事

石は廣大に菜園を設け、百花を見て目を悦し、具花、根葉を製し、紫根、茜は自然に野原に生し、日本一の品なり、是を自然、実生、沢山に繁茂の法を行ふ時は、廣大の産物となり、尤、両品染出しの仕法も、取行ひ候事、其外、茶園、煙草、畑、楮、畑、漆、畑、紅花、畑、能く手入をいたし、繁荷せしめ、産茶を制し、煙草を切出し、紙漙を製立、塗物を仕出し、紅を製し、蠟燭をこしらへ、かほちや、にんしん、燕等を仕付、砂糖を製し、杯、廣く取行候

一 硝石製造之事

石は是、道國中の、葉、畑、硝を、盛岡に、附上、製造せしを、三戸、五戸、七戸、野邊、地、兩、鹿角、は、三本

木に、役所、取、建、製、造、取、行ひ、候へは、人、馬、運、送の、勞を、省き、是も、又、他、邦に、交易すへし

一 罪人養育之事

石は、是、まて、國中へ、追、放に、相、成、候、程の、罪人、以、来、三、本、木へ、被、遣、旨、台、命を、蒙り、候、上、は、延、繩、菰、草、履、鉄、さし、等、常の、賦と、す、又、その、人の、強、弱に、奇、見、計ひ、仕、付、方、は、勿、論、産、物、會、所、諸、用、に、用、ゆる、時、は、物、産の、助、けと、成、可、申、事

一 究民扶助之事

石は、田、畑、數、万、石の、開、墾の、調に、付、て、は、人、畑、繁、盛、第一、なる、が、故に、天下の、究、民、三、本、木に、來るを、扶、助、いたし、其、人の、強、弱に、奇、普、請、方、物、産、方、に、配、當、いたし、色、々の、物、産、開、く、助、け、となすへし

一 遊文屋之事

石は、奥、羽、未、左、不、毛の、地、多、く、して、人、畑、少、く、物、産、薄、く、誠、に、天下、往、來の、用、事、な、き、程の、場、所、なるに、松、前、大、地、北、夷、地、近、手、御、開、墾の、御、調に、付、て、は、諸、國の、人々、往、來、繁、く、相、成、候

に付遊又さし置き行旅の憂情を慰る時は又人烟稠密いたしのみならず自人産業開
けて繁花の術と成へし

一 奥通大豆市川メ粕之事

右は福岡より七戸迄の大豆数万石出るを三本木に於て買入野辺地湊へ積出し亦市
川湊メ粕数万石是又買入隨一の場所なれば両品を買込天下交易の助けとなすへし
石之通物産取開く時は地遣は勿論天下有用の品出産して交易の道を行小時は十年なら
ざるに天下の樂土と相成申へく猶委細は追々勘考を加ひ候事

一新に取建候村々の儀は幾箇村幾萬家と申儀廣大成故未だ見込極まらず新宿の儀は交易
の場所並拿所下左十二町四方町地をひらき最早一年ならすして數十軒の大商人居住に
至り相意の賣買ありて皆々相續に至れり右拾式丁四方へ大土手を築廻し杉を植立風除
とす其内には上水川を堀とす町出口に高さ九尺幅四丈袴腰形に四尺張出し矢の羽に切
石を組上げ其上に長さ九間幅四間にして左右に三尺の高欄を付四隅に函袖を開き檜材

鉄物付力柱あかゝぬ帽子に橋の銘を彫付の調あり南の方町入口は惣門を建前の一間に
堰を石橋にして左右に一里塚あり夫より南方四町の街道幅拾間左右に上手並木松を植
夫より南は百姓家建續け候調なり町内一丁限に仕切門を付横丁あり十二丁の内着盛割
にして表町は小路八間外に三尺の中堰を堀横丁裏丁は六間小路なり惣して此内に町家
百姓家寺院社地會所役所を建込追々繁盛して一大邑にならん事を願ふなり

一 人民の儀は國中田畑不足にして産業少き故百姓共の二三男女子共有余して今日の活業
に難儀成故或は懐妊すると落し或は出産すると直様殺し或は養育せしもあれば二三才
の間に捨子なといたし其無道には是非に及はざる事なり漸く生人して丈夫となれば出
嫁の又は手回取のと名付羊々南方は仙台領北方は松前地に行く然るに三本木平に扶助
の法備り懐妊の婦を聊なりヒも手当を施し養育をしめ丈夫の者は夫々田畑割渡し一軍
の向食料を予へる時は日を過す月を越すして人民繁茂し住居するに至る然れば他國の
人を待に及はずなれとも兎角大開業なれば他國の人といふ共米糶を荷ひて来る者あら

は凸抱たきものなり忒北部日本興地の極なれば土民産業に甚たうとき故に皆く天下の命れる産業に委しき人達を集めて生産を大ならしめ人事を思念するのみ

一新地開業に付て第一に神社佛閣を造營し穢罪禳願の守護を建立して人民を教導し殃災を退除せしめんはきて神明宮を建立しては大皇國の安らけく平かならん事を祈り奉り稻行社を建立しては五穀の豊熟を祈り馬頭觀音を安置しては諸民安寧大畜庶難を乞願ふものなり且両社の詞官としては社家を置て空前に仕へ奉り神樂を奏しては風を爽し俗を移しむるを以て本とし又觀音の守護としては一天護持の宗意たる修験を置き朝には照相三密の檀上に天下靜謐開元清貴踐快樂を祈り暮には一心三觀の床の上に神佛の感光を倍增せん事を以て旨とし又滅罪懺悔の教化に諸宗の僧侶を以て是を務しむむ諸宗多き中に浄土真宗を以て土民教化の第一と見詰且相馬國新田にても取行候よし承り及び候故新地開業場を殊らす石宗門にいたし度考の處領内の百姓共十に其七分は浄土宗禪宗なれば一向宗帰依のものは宜しけれとも宗旨皆備候するものは強て押付る

事も人情に成るゆへに石両宗の内一ヶ寺東西の浄土真宗ニヶ寺外他宗打込の中庵一ヶ所取建候事に内評取極め其外開発場所村々へは三本木平寺三ヶ寺の内出張庵取建の儀は此方承由のみにて其村と具寺の相談に任するなり

一開発普請料人民檢育料寺社取建料として数十万兩の黄金なければ一大團開業十分に行届不申此儀に当惑致しすかれとも今年まで六ヶ年の内に色々と難波の金配を取盡し先以て上水成純田園開発人民居住の創業の端をひらきしかは此上金配十分に至れば忍ち大開業となる至らざれば自然々々にひらく手續に仕法を相立具内天下富貴の人の力を得て金配を求め一日も早成取申度明尊神佛に祈誓を誓居候なり忒出金の人へは永く其報恩として開発の土地を分け与ふべきの旨國君より免許を蒙り其割合は大凡田高邑反野字見込にして斗代五斗此出来四ツ成にして二斗七ヶ年中其作り人作り取ハヶ年目より出金の人え永代の手買と定め此出金三兩程也然るに田地にも上中下毛附にも上中下あり手前の直々手作もあり又此方にて取計ひ遣しもあり其割合さま／＼ある事なれと

500
28

青森縣中央圖書館プリント集第三

昭和十二年十二月七日印刷
昭和十三年十二月十日發行

編輯兼
發行人 青森市濱町
吉岡 龍太郎

プリント 青森市長島町
六 葦 堂

發行所 青森縣中央圖書館

(一)

も新田の事なれば大凡斯の趣といふまでにて在細の義は對面親炙して實地研究の上相
談にある事なりすかして出金の調に至れば寺院建立も傳十次郎父子の寄進を以て何ら
立派に普請致し佛尊像安置取行普く衆生資度の心願なり

石は開業之大綱目取調る也猶委細の事は往々考了を加ひん兎角大開業の事なれば四方石
子の力を添られずんは微力の我父子也も行互申間鋪と明暮案し煩ひ是のみ一向希所なり

萬延元年月日

新渡戸十次郎

平常訓

終

